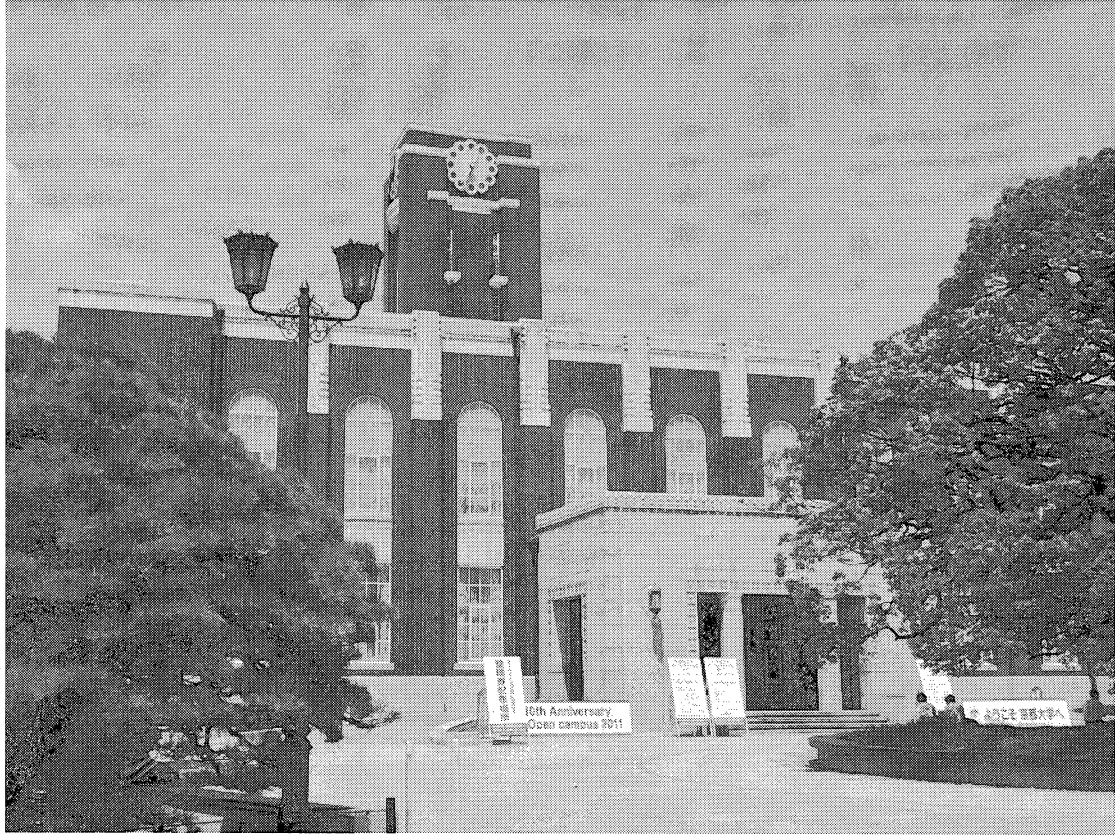


4. 京都大学大学文書館



時計台記念館。1階に大学文書館の展示室や事務室などがある。

基本データ

開設年月日：2000年11月1日

所在地：京都市左京区吉田本町

HPアドレス：<http://kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/>

刊行物：『京都大学大学文書館だより』、『京都大学大学文書館研究紀要』ほか

所蔵資料点数：非現用法人文書（約50,000点）、図書・刊行物（約20,000点）

個人資料（約60,000点）、写真（約14,000点）

専任職員：准教授1名、助教2名

調査日：2011年8月9日

場所：京都大学 大学文書館

お話しいただいた方：大学文書館准教授 西山 伸 氏

大学文書館助教 坂口貴弘氏

調査者：鈴木拓也（記録）、田窪直規（写真）

富岡勝、増田大三

1. 「貴学における大学アーカイヴズについて」

1-1 設置目的・設置経緯 ―情報公開法施行と百年史編纂終了を背景に―

京都大学大学文書館は、京都大学の歴史に係る各種の資料の収集、整理、保存、閲覧及び調査研究を行うことを目的に、2000年11月1日に設置された。

2001年4月に情報公開法が施行されるのに関連して、保存期限が満了した事務文書のうち歴史的・文化的・学術的な価値のあるものを選別・保存するための組織整備が求められたことと、『京都大学百年史』が2001年7月頃に完成して編纂後の史資料の保存・公開・活用が課題となったことと、の二つを設置の背景として挙げることができる。



新書庫（旧京大会館）の内部

1-2 組織形態 ―研究部門と事務部門―

「館長」「運営協議会」「研究部門」「事務部門」から構成される学内の独立組織である。館長は、学内の教授が兼任する。

運営協議会は、学内各部局から選ばれた10数名で構成され、年1回開催される。

研究部門は、兼任の「教授」および、専任の「准教授」1名と「助教」2名が配置されている。

事務部門は、総務部総務課文書企画掛が担当している。総務部総務課との緊密な関係が本大学文書館の組織上の特徴である。

ほかに、非常勤職員が8名いるが、うち2名は新書庫への移転にともなう定員で、9月から6名になる。6名のうち、2名が大学院修了者などの研究系、4名が非研究系である。



常設展示

1-3 活動内容 ―評価・選別実施、新書庫、展示スペース―

主な活動は、資料の収集、資料の整理、資料の公開、調査・研究活動、広報・教育活動の五点であり、多岐にわたっている。

資料の収集では情報公開法の施行をきっかけに、学内規則に基づき、非現用となった事務本部と各部局の法人文書を毎年受け入れている。文書のライフサイクルに応じた受け入れシステムを導入しているといえる。これを可能にするために、大学として収蔵スペースの充実に努めている。現在は、京都大学百周年時計台記念館の一部と旧京大会館を転用した新書庫（2011年度から）を収蔵スペースとして利用としている。個人資料の受け入れも行っている。退職後に提供されたり、亡くなった後にご遺族から提供される場合が多い。99.9パーセントは紙の資料で、例外的に旗や肖像画などの現物資料もある。蔵書以外は、寄贈の話があったものはすべて受け入れてきたが、再検討の時期に来ている。

資料の整理では、非現用文書の評価・選別・廃棄を、各部局作成の目録データと照合しながら労力をかけて実施している。現用文書は12～13万冊ほどあり、毎年1万冊程度が非現用となって移管されてくる。評価基準は、「研究教育の具体的な内容を示す文書」（会議関係、予算関係、申請書、報告書など）は残し、日々の物品購入書類や単純な通知類は廃棄している。資料目録の作成や所蔵資料検索システムの整備にも力を入れている。

資料の公開では、時計台記念館に常設の展示スペースと閲覧スペースを設置して実施し

ている。昨年度の利用者数は、展示室 29,953 人、閲覧室 680 人であった。

調査・研究活動では、京大の歴史とアーカイヴズ学を研究し、研究紀要の発行とともに、資料目録の発行などを行っている。

広報活動では、常設展示「京都大学の歴史」、企画展（年 2 回）、ニューズレターの発行を行っている。教育活動としては初年次教育「京都大学の歴史を知ろう」、全学共通科目（京都大学の歴史）を実施している。新採用職員研修も担当している。

2. 「貴学にとっての大学アーカイヴズの意義」について

資料を使って、根拠をもとに大学の歴史を語ることができる場として意義がある。もともと大学アーカイヴズに関して潜在的な需要があったが、設立から 10 年が経過した今、自由な出入りができる時計台記念館内に位置していることもあって、大学の歴史を紹介する場として定着している。講演依頼なども、ここ数年増加している。

3. 「国公立大学・私立大学における大学アーカイヴズの意義」について

国立大学は公文書管理法が法的根拠となり、大学アーカイヴズの意義はわかりやすい。しかし、私立大学の場合も助成金の交付を受けている教育的機関として、自らの歴史を説明する社会的責任があるので大学アーカイヴズの意義は大きい。

もちろん、自校史教育や教職員への研修・啓発活動でアーカイヴズは有効である。来学された方々に対して、展示を通じて大学をより深く理解していただくことも可能となる。また、大学沿革史編纂と大学アーカイヴズはそれぞれ別の活動であるが、大学沿革史編纂を機会に大学アーカイヴズの必要性が学内で理解されやすくなる、ともいえるだろう。

調査を振り返って

京都大学大学文書館の事例は、大規模施設を設けて非現用文書の整理・保存を徹底して実施している例として貴重である。とりわけ、旧京大会館の建物全体を利用した地上 3 階地下 1 階の新書庫には、他大学には見られない意気込みが感じられる。

また、修学旅行生も訪れる時計台記念館に常設の展示スペースを有して年間約 3 万人が訪れているという事実がから、大学アーカイヴズが大学の顔としての役割も果たすことが可能であるということがわかる。近畿大学でも展示スペースを有する建学史料室があるので、その機能を一層充実させていくことの重要性を感じた。

（富岡勝）